

古典文法 助動詞③ 「たり、り」問題

文法的意味

たり・り 「完了」 「…た、てしまう」
「存続」 「…ている、である」

【練習1】傍線部を口語訳し、そこに含まれる助動詞「たり、り」を文法的に説明せよ。

(例文) 風波やまねば

(口語訳) 止まないで

(文法的説明) 打消の助動詞「ず」の已然形。

1 頸もちぎるばかりに引きたるに、耳鼻欠け穿げながら
抜けにけり。

頭にかぶっていたかなえを首もちぎれるほどに——ところ、耳も鼻も欠けもげながらかなえが抜けた。〈徒然〉

2 「天竺に二つと無き鉢を、百千万里の程行きたりとも、
いかでか取るべき。」
とも 逆接仮定条件の接続助詞。たとえ——としても

「天竺にも二つと無い鉢を、百千万里の道のりを——、どうやって手に入れることが出来ようか、いやできまい。」〈竹取〉

3 人数を知らんとて、四五両月を数へたりければ、(中略)
総て四万二千三百余りなんありける。
けれ 過去の助動詞「けり」の已然形。——た ば 順接確定条件の接続助詞。——すると。たところ

(飢饉で亡くなった)人数を知ろうと思つて、四月五月の二ヶ月間——、全部で四万二千三百余りであつた。〈方丈記〉

4 五十の春を迎えて、家を出で世を背けり。
世を背く 出家する。仏門に入ること

五十歳の春になって、家を出て——。〈方丈〉

5 其の時 自ら事の便り有りて、津の国の今の京に
至れり。 至る行く・訪れる

6 綱絶ゆる即ちに、八島の鼎の上に仰け様に落ち給
へり。 給ふ 尊敬の補助動詞。―なさる

7 (かぐや姫は)常よりも物思ひたる様なり。
物思ふ 思い悩む

8 怪しがりて寄りて見るに、筒の中 光りたり。

9 道の辺を見れば、車に乗るべきは馬に乗り、衣冠
布衣なるべきは多く直垂を着たり。

10 船子楫取りは船唄歌ひて何とも思へらず。

11 道知れる人も無くて、惑ひ行きけり。

12 しつべき人も混じれど、
ど 逆接の接続助詞。―けれども

その頃、たまたまある機会があつて、摂津の国の今の都(福原京)に――。〈方丈〉

綱が切れるやいなや、中納言は八島の鼎の上に――。〈竹取〉

(かぐや姫は)いつもよりも――様子である。〈竹取〉

不思議に思つて近寄つて見てみると、竹の筒の中が――。〈竹取〉

道のあたりを見ると、牛車に乗るはずの高貴な人が馬に乗っており、本来衣冠や布衣の姿であるはずの人(貴族)が、直垂(武士の服)を――。〈方丈〉

船員と船頭はのんきに船唄を歌つて、何とも――。〈土佐〉

――もいなくて、迷いながら行つた。〈伊勢〉

返歌をすることのできる人も――、(誰もしなかった)〈土佐〉